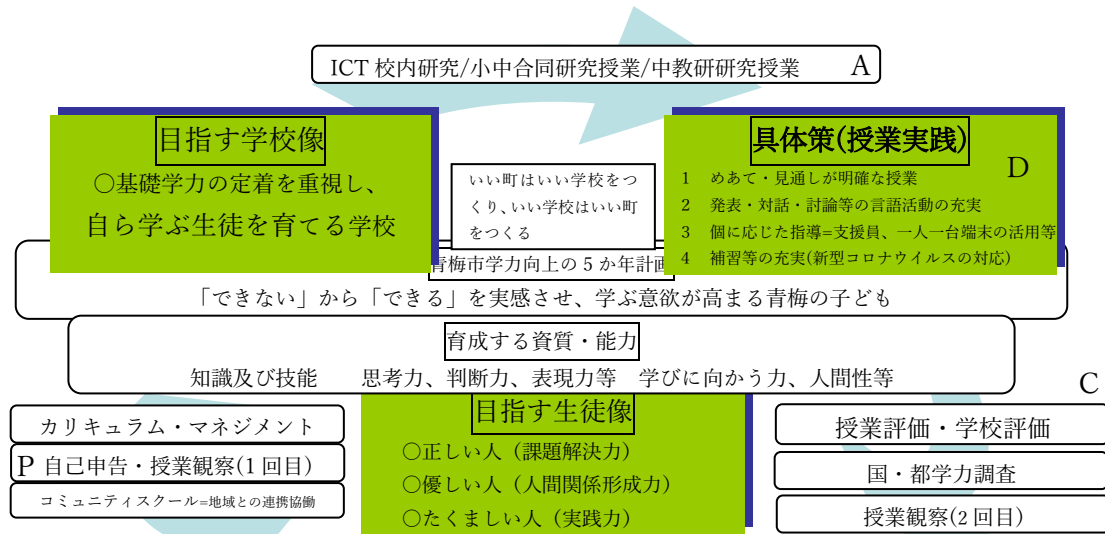


令和5年度 学力向上推進プラン 授業改善に向けて

令和5年4月26日

青梅市立第六中学校校長 吉田 稔

◇学力向上に向けたPDCAのイメージ



◇学力調査の分析結果

○全国学力学習状況調査(3年対象)…生徒の35.5%が1日当たり4時間以上ゲームをしている(都・国は約16%、動画視聴も同様傾向)。一方で1日に全く読書をしない生徒が41%(都35%)、2時間以上読書する生徒は0%(都・国5%)である。また、家庭で1日当たり3時間以上勉強する生徒は24%(都14%)である。一方で2時間以上または1時間以上勉強する生徒は合計41%(都・国60%)であり、家庭学習はある程度勉強する生徒とそうでない生徒の二極に分かれている。なお、地域行事の参加率は本校で60%(都30%)と積極的である。

本校の正答率は、3年 国63%(都70・国69)、数45%(都54・国51)、理42%(都51・国49)であり、領域では読むこと(国語)、数と式・図形・関数(数学)、生命を柱とする領域(理科)のそれぞれ思考・判断・表現の観点での学びに課題が見られる。

昨年度の市の成果目標「自分にはよいところがある」の回答結果は、市72.9%、本校76.5%(令和5年度市目標値75%)、「家で自分で計画を考えて勉強する」の回答結果は、市58.0%、本校64.7%(令和5年度市目標値60%)、「自分の考えを深めたり、広げたりできた」の回答結果は、市72.1%、本校59.8%(令和5年度市目標値75%)であった。総合的な学習の時間を中核に各教科との関連性をもたせた上で話し合いにより理解を深め、ゲストティーチャーの助言で理解を広める等により授業改善を進めて課題解決力を育成する必要がある。

○都学力調査(全学年対象)…〔学びの姿〕各教科の「よくわかる・どちらかといえばわかる」

教科	国語	社会	数学	理科	英語
本校(都)%	90(89)	61(83)	66(85)	81(82)	81(77)

→教科の特性により数値の差はあるが、概ね生徒は授業中、「理解している」。

○授業評価の分析…生徒による授業アンケート(年2回のうち第1回分一学期末7/27集計)

「先生の授業で、今日は何を学ぶか(何をするか)、理解している」で「はい」と回答

教科	国語	社会	数学	理科	英語
全学年%	70	54	54	63	64

→教科による差または学年差があるが、「まあまあわかる」を含めると概ね理解している。これらの結果から授業中その場で理解しているものの学力向上に結びつかない生徒がいる。理由として家庭学習の時間が十分とれていないため定着していないと考えられる。

1 授業と評価の一体化に向けて

(1) 評価とは目標に準拠した評価であること、評価規準に基づいた評価であること等、単元のはじめや授業での評価規準を説明することが重要である。さらに各教科において1時間の授業の「めあて」を生徒に明示して何を学ぶか、何ができるようになるのか、授業の目標を明確にするとともに個別最適な学習と協働的な学習による深い学びを目指す。

(2) 教師は生徒に評価規準の3点目「主体的な学習に取り組む態度」について授業で「粘り強さ」と「学習の調整」のための「学習のポイント(活動の手立て)」を単元ごとに具体的に示すようにする。「評価規準」という言葉による説明ではなくともこれまで通り「学習のポイント(活動の手立て)」を示すことで、生徒が目標を達成しやすいような支援につなげる。これにより教師も評価規準を生徒と共有し、昨年度に続けて主体的な学習に取り組む態度の評価規準を精度の高い、生徒の実態に合ったものにして修正していく。

2 個別最適な学習における支援・指導(一人一台端末の活用1)

「指導の個別化」においては支援が必要な子供により重点的な指導を行う。そのため支援員による学習支援を行うと共に教材の個別化やタブレットを活用した授業づくりを進める。「学習の個性化」については生徒の興味・関心等に応じ、授業において一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を設けるなど授業改善を進める。家庭学習においても課題解決型の課題に取り組ませ、主体的に取り組む態度の育成につなげる。

3 協働的な学習の推進(一人一台端末の活用2)

学習の理解を深める手段として活用する。教科・単元の特性に応じて教科書のQRコードの読み取りやGoogle Jamboard、タブレットのカメラを用いた自己評価等の活用、話し合い活動の充実の利用し、対話的な学びの深化につなげていく。

◇具体的な学力向上計画ー授業と評価の一体化に向けてー

- 1 自己申告・授業観察の活用…自己申告書に新しい評価への具体的な取組、タブレット等ICTの活用、個別最適な学習と協働的な学習の充実に向けた具体的な方策を記述する。
- 2 学力向上推進プランの活用…5月に授業改善の方向性と具体策をプランで提示する。
- 3 学力調査結果・授業評価の分析及び共有…全国・都の学力調査結果、生徒による授業アンケート、保護者による学校評価(年2回)、コミュニティ・スクール委員による学校評価(年1回)結果を全教員で回覧し、成果と課題の共通理解をもとに授業改善へつなげる。
- 4 本校における教師道場の研究授業(5月)、校内研究授業(6月6日)の活用…ICTを活用した授業を行い、個別最適な学習、協働的な学習の充実に向けて校内研究テーマ「個別最適な学習の充実」の下で学校が一体となって授業改善を進める雰囲気醸成する。
- 5 総合的な学習の時間「青梅学」にゲストティーチャーによる授業を導入して地域の身近な課題について他の教科との関連を図り、課題解決力を身に付けさせる。
- 6 中教研研究授業等の活用…評価規準「主体的に学習に取り組む態度」についてより精度の高い評価を求めて各教科で研修を深める(昨年度からの継続)。
- 7 小中合同校内研修会の活用…評価方法の工夫の意見交換、数学出前授業を実施する。